

## 事態把握と翻訳

### ——認知言語学から見た逐語訳とアダプテーションの間

大藪 正彦

#### 1 はじめに——翻訳・通訳倫理の諸相

職業翻訳者・通訳者に対しては、世界の各種団体で倫理規定が定められていることが多い。例えば、「正確性」「公平性」「守秘義務」などがその論点となる<sup>(1)</sup>。しかし、事はそう単純ではない。例えば、「正確性」——つまり、起点テキスト(ST)に忠実に訳すこと——の達成は、一見、翻訳者・通訳者にとつて当然のことのように思われる。だが、いかなる場合も省略、付加、説明、要約などが一切許されないのかと考えると、実際にはケース・バイ・ケースである。例えば、同時通訳の場では、一語一句を忠実に訳すことよりは、聞きやすさや主要メッセージの伝達に重きが置かれる。つまり、「分かりやすく編集する」ことは認められているわけである。一方で司法通訳の場になると、もとの発言の言いよどみや繰り返しなども保持すべきであるとされる。法廷の場では、被告人の話し方も、重要な情報の一つとされるからである。

さらに文化的差異という点も無視できない。水野真木子が挙げている医療通訳の例を紹介すると<sup>(2)</sup>、アメリカのナバホ族では、言葉に出されたことは現実になると信じられている。そのため、「あなたの場合、手術をしても後遺症が残る可能性が高い」と言われると、患者は非常に嫌がるという。そのような場合、「あなたと同じような症状の人は、手術をしても後遺症が残る可能性が高い」というように、患者本人を直接指す言い方を避ける必要がある。 「文化的状況を考慮した上での正確性」が求められるというわけである。

このように「正確性」といつてもさまざまな側面を考慮する必要があるわけであるが、本章では、言語学の立場から、言語内のことに限って「正確性」についての議論を深めてみたい。二言語間の差異が大きい場合、目標テキスト(TT)の言語的特徴を考慮した上で翻訳・通訳が行われる必要があることは容易に想像されるところである。実際、言語差が翻訳に与える影響については、これまでもさまざまな形で論じられてきた。数の区分などはその代表例であろう(「枯れ枝」には何羽の鳥が止まっているのか、など)。言語内の特徴に限ってみても相当に広範な領域が存在するが、本章で取り上げてみたいのは、近年認知言語学の分野で論じられることの多い「事態把握」(constual)という側面である。

なお、筆者はドイツ語を専門としているため、用例は主にドイツ語と日本語を用いることをお断りしておく。本書の他の論考と同様、文学作品を中心に取り上げる。

#### 2 翻訳方法の多様性——あるいはポストメディア時代の翻訳論

翻訳の「正確性」と言っても、何をもって「正確」とするかは当然ながら単純な問題ではない。「直訳」か「意訳」か、というよく知られた素朴な二分法をめぐる議論もこの種の問題であると言える。話の見通しをよくするために、本節ではまず翻訳の方法にどのようなものがあるのか簡単に見ておきたい。次の藤濤文子による分類が分かりやすい<sup>(3)</sup>。

- ① 移植 (S Tの綴りをそのまま導入する)
- ② 音訳 (S Tの音声面を導入する)
- ③ 借用翻訳 (語の構成要素の意味を訳す)
- ④ 逐語訳 (一語一語を対応させて訳す)
- ⑤ パラフレーズ (同じ内容を別の表現に言い換える)
- ⑥ 適応 (目標文化に合わせて調整・変更する)
- ⑦ 省略 (S Tの要素を全く削除する)
- ⑧ 加筆 (S Tに含まれていない要素を加える)
- ⑨ 解説 (注などによりメタ言語的に説明する)

①の「移植」はS Tの綴りをそのまま導入するもので、例えば「BMW」をそのまま「BMW」と訳すような場合、②の「音訳」はS Tの音声面をT Tに導入するもので、「直子」を「Naoko」と訳すような場合である。③の「借用翻訳」はS Tの構成要素の意味をT Tの言語に訳すもので、「桃子」を「Pirischkind」(桃・子)のように訳す場合である。以上は、主に語や句のレベルでの翻訳方法である。

それに対し、④以下は文やテキストのレベルにも及ぶ。このうち④の「逐語訳」と⑤の「パラフレーズ」は、少々複雑であり、また本章の重要なポイントでもあるため、次節であらためて取り上げることにする。⑥の「適応」は、T T文化内のみより馴染みのある別のものに置き換える方法である。ドイツ語の「Kirche」(教会)を「お寺」と訳すような場合が該当する。⑦の「省略」や⑧の「加筆」については、特に例を挙げることはしないが、実際に小説の原文と翻訳を対照したことがある者であれば、程度の差こそあれ、頻繁に出会うものである。最後に、⑨の「解説」は、注を付したり、本文中に括弧などで説明を挿入する場合である。日本語では「昔話」のようにルビを付すという方法もある。

以上、藤濤による九つの分類を紹介した。このうち①～④の四つは、S Tを忠実にT Tへ再現しようとする翻訳方法であり、「S T志向的」とまとめることができるだろう。これらの方法によりT Tに異文化要素がもたらされると異化効果が生じるが(異化翻訳)、時として理解に支障をきたす可能性がある。一方⑤～⑧は、S TをT Tへ適合させようとする翻訳方法であり、「T T志向的」とまとめることができるだろう。これらの方法では自然で読みやすい訳となるが(同化翻訳)、S Tに多少の操作を加えるという点が「忠実性」という観点から問題となる。なお、最後の⑨は、S T志向的な翻訳、T T志向的な翻訳のどちらでも用いられる。

「正確性」に話を戻すと、何に重きを置くかによって当然評価は異なってくることになる。ただし、ここ半世紀ほどの翻訳理論は、大まかに、等価志向から機能志向への流れであったと言えるだろう<sup>(4)</sup>。言い換えると、S T志向からT T志向への流れということであるが、これは「ポストメディア時代」とも称される現代の情勢と無関係ではない。I T革命やグロバーリゼーションにより、情報のメディア、そしてその受け手はますます多様化しており、それにより翻訳の営みも、質的・量的に大きな変貌を遂げた。S Tの正確な再現が必ずしも優先されないという状況は、冒頭で触れた同時通訳の現場に限らず、映画や動画の字幕、インターネットの情報などでも起こり得る。つまり、S TとT Tの対応関係は単純には決まら

ず、状況や目的に応じて適切に選択される必要があるということである。

### 3 逐語訳からアダプテーションまで

前節で保留にしておいた④「逐語訳」と⑤「パラフレーズ」を見ていこう。STに最も「忠実」な翻訳というものを文レベルで考えてみると、いわゆる「逐語訳」ということになる。ただし、「逐語訳」にもさまざまなレベルがある。例えば、厳密な正確さが要求される言語学の論文では、例文にグロス (gloss) と呼ばれる注解が添えられるが、この注解は、文法的な機能を担うだけの語や形態素にも及ぶ。たまたま手元にあるドイツ語の論文から紹介すると、次の通りである<sup>(5)</sup>。

- (1) atama ga ita-i. <アタマガ イタイ  
Kopf NOM weh-PRS 頭 主格 痛い・現在  
»Kopf fühlt sich weh an« <頭が痛く感じられる>

日本語の「頭が痛い」という文を説明しようとしたものである。まず具体的な意味内容を持つ語に対して等価的な語が当てられている (Kopf<頭>と weh<痛い>)。加えて、文法的な要素について、スモールキャピタルにより文法的な意味 (機能) が示されている (NOM || Nominativ<主格>、PRS || Präsens<現在>)。そして次の行には引用符に挟まれて逐語的なドイツ語訳が示されている。ただし、実際のドイツ語ではこのような言い方はしない (話し手が自分の頭痛について述べる場合、ドイツ語では感覚主を明示して 'Ich habe Kopfschmerzen' <私は頭痛を持っている>または 'Mir tut der Kopf weh' <私には頭が痛い>と言うのがふつうである)。これは「逐語訳」の自然さ・不自然さについての問題につながっていく。なお、日本語では「逐語訳」というとき、語順までは考慮されないのがふつうである。藤濤も、「逐語訳」を「一語一語を対応させて」訳すこととしているが<sup>(6)</sup>、挙げられている例を見ても、語順は考慮されていないことが分かる (ただし文構造は考慮されている)。本章でも「逐語訳」という場合、語順は考慮しないことにする。

「逐語訳」の不自然さを解消しようとするならば、次の可能性として「パラフレーズ」が用いられることになる。具体例を見てみよう。

- (2) a. Den alten Heilandt stimmte Schugger Leos Anblick heiter. <年老いたハイラントをシュガー・レオの眺めが快活にした> (G. Grass, *Die Blechtrommel* <ブリキの太鼓>)  
b. ハイラント老人はシュガー・レオの姿をみて、快活になった。(高本研一訳)

英語教育でもお馴染みだが、他動詞構文で無生物主語が用いられている例である。逐語的に訳すと日本語としては大変座りが悪い。通常、このレベルであれば「逐語訳」でないからといって問題視されることはないと思われる。むしろ自然で読みやすい翻訳が求められるところであろう。実際、(2b)の日本語訳でも「パラフレーズ」——形式的な対応は考慮せず、意味内容をほぼ再現する——という選択がなされている。ちなみに、日独の小説の翻訳を対照した藤濤の別の論考によると、「パラフレーズ」は全体の六割以上を占めるとのことであ

る(7)。

では次のような場合はどうか。絵本からの引用である。

- (3) a. *Bald wurden die Schatten länger als sie selbst und sie führen nach Hause.* (やがて影が彼ら自身よりも長くなりました。そして彼らは家へ帰りました) (H. Heine, *Freunde* (ともだち))
- b. いつのまにかかげがなくなつた。3びきのせたけよりもほらこんなに。さあうちへかえろう。(池田香代子訳)

確かに意味内容はほぼ再現されていると言えるが、一方で、原文とかけ離れているとも言えそうである。ドイツ語の原文では、「彼ら」という三人称で語られていること、「帰りました」のように過去時制で語られていることが確認できるが、日本語訳では「さあうちへかえろう」と読み手を巻き込んだ形での語りかけになっている。この点をどのように考えるかは次節以降詳しく述べていきたいが、現段階では、絵本は主に子どもを読者層として想定していることから、読みやすさが最優先事項の一つとなり、従ってその言語の特徴を如実に反映している、つまりTT志向が強いと考えられることを指摘しておきたい。

「厳密な逐語訳」から出発し、「自由度の高いパラフレーズ」へと話が及んだわけであるが、さらに進めて「逐語訳」の対極にあるもの——ただし、まだかろうじて「翻訳」の要素を残しており、完全な「創作」へは至らないもの——を考えてみるならば、それが「アダプテーション」(翻案)ということになろう。再び手元にある例を一つだけ見ておきたい。『グリム童話集』に収録されている「猫とねずみ」とも暮らし」の原文と、町田康『猫とねずみのもとぐらし』の冒頭部分だけを引用したものである。町田の作品では、全体として原作の内容が踏まえられているものの、大幅な改作がなされていることが見て取れる。

- (4) a. *Eine Katze hatte Bekanntschaft mit einer Maus gemacht und ihr so viel von der großen Liebe und Freundschaft vorgesagt, die sie zu ihr trüge, daß die Maus endlich einwilligte, mit ihr zusammen in einem Hause zu wohnen und gemeinschaftliche Wirtschaft zu führen.* (Brüder Grimm, *Katze und Maus in Gesellschaft* (猫とねずみのもと暮らし))
- 猫がねずみと知りあいになりました。そして、あんたが好きだ、仲よしになろう、というようなことをさんさん聞かせたものだから、とうとうねずみもその気になって、猫といっしょにひとつ家に住み、暮らしをともにすることにしました。(野村法訳)
- b. 教会の前の広場で猫はうろたえました。しまった、と思いました。猫の前にはねずみがおりました。ねずみは燃えるような目で猫をにらんでおりました。教会の屋根に十字架がそびえておりました。(町田康「猫とねずみのもとぐらし」)

「アダプテーション」については、本書においても各執筆者によって論じられているので詳細はそちらに譲りたい。本章で取り上げるのは、特に「パラフレーズ」と呼ばれる方法が適用されるケースである。「忠実性」という軸で考えてみると、少なくとも表層的なレベルでは、「厳密な逐語訳」から「自由度の高いパラフレーズ」へと進むに従って「忠実性」の度合いは低くなっていると言えるだろう。しかしながら、以下で見ることになるように、逐語的な訳が必ずしも正確な訳とならない場合がある。そのことを理解する鍵となるのが「事

態把握」である。

#### 4 事態把握とは何か

ある事態を言語化する際、話し手は、対象となる事態をどこから眺め、そのどの部分を取り上げ、そしてそれをどのように言語化するかといった一連の決定を主体的に行う。同じ「道」であっても、それを「上り坂」と呼ぶこともできるし、「下り坂」と呼ぶこともできる。また「帰り道」のように別の観点から意味づけることも可能である。このような、発話に先行して行われる、話し手が事態を解釈する認知的営みのことを、認知言語学では「事態把握」(construal)と呼んでいる。

事態把握はいくつかの側面に分けて考えることが可能である。例えばロナルド・ラネカーは、事態把握を構成する要素として、「詳述性」(specificity)、「焦点化」(focusing)、「際立ち」(prominence)、「視点」(perspective)などを取り上げている<sup>(8)</sup>。「詳述性」とは、事態(対象)をどの程度詳細に描写するかという選択である。次の「焦点化」は、事態を構成する要素の何を取り上げるのかという選択のことである。さらに何を「前景」とし、何を「背景」にするかという選択も含まれる。このことは、どの要素に最も注意を払うのかという次の「際立ち」とも関連している。そして最後に「視点」は、事態をどこから見るのかという選択である。

人間は、どのような言語を話しているかにかかわらず、同じ事態をいくつもの異なるやり方で把握する能力、そしてそれに応じていくつもの異なるやり方で言語化する能力を有している(事態把握の普遍的側面)。このことを踏まえると、事態把握とは究極的には個人レベルの問題であるという言い方もできる。一方で、事態把握は、言語間横断的なレベルで、個別言語ごとの傾向性という興味深い様相も示す(事態把握の相対的側面)。本章で問題としたいのはこの相対的側面である。この点について、節を変えて見ていきたい。

#### 5 主客合一的な事態把握と主客対立的な事態把握

とりわけヨーロッパ言語との対照研究において、日本語の特徴として指摘されるのが、「主客合一」的な視点の取り方である。ごく簡単な例でその特徴を確認しておこう。古典文学からの例である(以下、例文中の強調はすべて本章の筆者による)。

(5) a. 今は武蔵の国になりぬ。(「更級日記」)

b. Jetzt waren wir in der Provinz Musashi. (今や私たちは武蔵の国にいた) (U. Kemper 訳)

日本語の原文では、旅をしている語り手の目に入った風景、言い換えると、語り手の「見え」の変化が「自己中心的」な視座からそのまま描かれている。自分の「見え」の中に自身はいないから、表現の中にも自分を指す言葉は出てこない。逆説的であるが、自己中心的な言語化は、自己を直接的に言語化しない。語り手(主体)は、言語化の対象となっていない事態(客体)にいわば埋め込まれた格好となっており、両者の境界はあいまいである。一方、ドイツ語訳では、wir(「私たち」という一人称代名詞が使われている。本来見えないはず



図1 主観カメラ (A. H. Müller, *Geheimnisse der Filmgestaltung* より)

の自分が見えていることになるが、言うまでもなく「私」を「私」として認識できるのは人間の重要な能力の一つである。語り手（主体）は、事態（客体）——この場合は自分自身を含む——に対し距離を取った形で事態把握を行っており、主体と客体の境界は明確である。つまり、ここでの両言語の表現の違いは、人間として可能な二つの視点の取り方に基づいていることになる（なお、同様の例は現代日本語でも認められる。例えば、新幹線でのアナウンス「まもなく静岡です」と、それに続く英語のアナウンス ‘We will soon make a brief stop at Shizuoka.’ など）。

ここで強調しておかなければならないのは、二種類の事態把握は、事態（客体）に対する話し手（主体）の距離の取り方を反映したものであり、最大限に「主客合一」的な状況から、最大限に「主客対立」的な状況まで、連続的な性質を示す、つまり、程度問題であるということ、さらに、しばしば誤解されるようであるが、日本語なら「主客合一」的、ドイツ語なら「主客対立」的といったように、一義的にどちらかのスタンスしか取られないということでは決してない、つまり事態把握の選択は傾向の問題であるということである<sup>(6)</sup>。

映画の例で考えてみよう。映画の撮影技術として、登場人物の視点からシーンを描くものがあり、「主観カメラ」(subjective camera)と呼ばれる。図1（左から右へという順序で描かれている）で言うと、左から4コマ目の最後のカットが該当する<sup>(10)</sup>。ただし、当該のカットだけを見ても主観カメラかどうか判断できない点に注意する必要がある（2コマ目と4コマ目を参照）。この例の場合、登場人物のカットが挿入されることにより、視点の切り替わり (perspective shift) が生じている。言語の話に戻ると、ある表現を「主客合一」的に理解すべきか、「主客対立」的に理解すべきかは、表現そのものからは判断できない場合もあり、文脈や状況、さらには聞き手（読み手）の主観的な解釈に左右される場合もあるということである。これについては、俳句の例が分かりやすいだろう。

- (6) a. 此道や行人なしに秋の暮 (芭蕉)  
 b. Diesen Weg / geht niemand / an diesem Herbstabend.  
 〈この道を／行く人はいない／この秋の暮に〉 (D. Krusche 訳)

日本語母語話者にとって、右の句では芭蕉自身が「この道」を行く人であり、その芭蕉が目の前に見えている道について述べているということ、ほとんど自明のことのように思える（図2）。しかしながら、この句はある任意の道の様子を描写したものととして読むことも可能である（図3）。実際にドイツ語母語話者に尋ねてみると、解釈に揺れがあることが分かる（ただし、日本語母語話者についても同様であり、筆者の経験では図3のように読むと答えた者もあった）。興味深いことに、この句を訳したディートリヒ・クルーシェ自身が、巻末の解説でこの句の解釈の仕方について注意を促しており

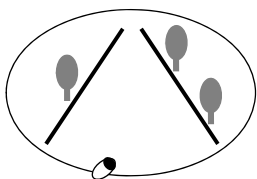


図2 自己投入的な読み

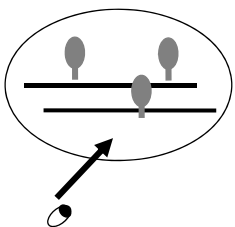


図3 客観的な読み

(11)、ドイツ語母語話者の読みに揺れがあることを示唆している。ここでのドイツ語訳はほぼ「逐語訳」である。それにもかかわらず誤解が生じ得るということは、翻訳において「忠実性」(ST指向)が必ずしも「正確性」を反映しない場合があることを意味する。

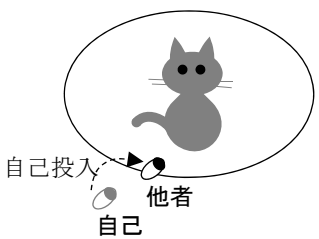


図4 主客合一+自己投入

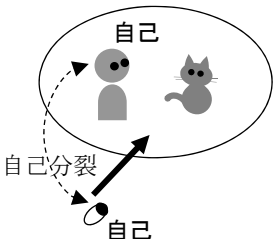


図5 主客対立+自己分裂

ある。図4は、誰か他者の目の前にネコがいる状況を、その人の視座から「目の前に」ネコがいる」と捉える場合、それに対し図5は、事態の中に自己が含まれる状況を「私の前に」ネコがいる」と俯瞰的に捉える場合である。この場合、自己が客体化されて言語化されることになる。

これまでの議論を踏まえて、二つの事態把握のタイプを次のようにまとめておく(12)。

#### 主客合一的な事態把握 (主観的事態把握)

話し手は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話し手は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態を把握する(自己投入)。

#### 主客対立的な事態把握 (客観的事態把握)

話し手は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話し手は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に(自己の分身を含む)事態を把握する(自己分裂)。

### 6 事態把握と翻訳(1) —— 空間と知覚

ここまでの議論で十分想像がつく通り、日本語では、英語やドイツ語などのヨーロッパ言語と比べ、事態を自己中心的な視座から捉え、「見え」のままに言語化する傾向が強い。この点が反映される言語現象は複数挙げる(13)、とりわけ空間表現と知覚表現

は重要である。具体例で見よう。

- (7) a. そのとき背後で小さな笑い声のようなものが聞こえた。ナカタさんが後ろを振り向くと「…」美しい細身のシヤム猫が「…」こちらを見ていた。(村上春樹「海辺のカフカ」)

b. Auf einmal ertönte hinter ihnen ein leises Lachen. Als Nakata sich umwandte, sah er [...] eine schöne schlanke Siamkatze, die [...] zu ihnen herüberschaute. <突然彼らの後ろで小さな笑い声が響いた。ナカタさんが振り向いたとき、彼は彼らの方を見ている美しい細いシヤム猫を見た> (U. Gräfe 訳)

まず傍線部の「背後」や「こちら」というのは、話し手(語り手)を原点として用いられるいわゆる直示表現である。つまり、話し手(語り手)から見て「背後」「こちら」ということであるが、右の例は、「ナカタさん」という三人称を主人公としている個所からの引用であるため、語り手は実際にはナカタさんに自己投入する形で状況を描写していることになる。一方、ドイツ語訳では、直示表現は用いられておらず、「hinter ihnen」(彼らの後ろで)、「zu ihnen」(彼らの方を)のように、参照点を明示化した客観描写になっている。次に、ドイツ語訳では太字部分が補われていることも特徴的である。注意深く読めば気づく通り、日本語の原文にある「美しい細身のシヤム猫がこちらを見ていた」というのは、ナカタさんの「気づき」「見え」を語っている。ドイツ語ではその点が明示的に訳出されている。

この点についても少し詳しく考えてみよう。「ナカタさんが後ろを振り向くと」という表現で使われている接続助詞「と」は、(継起的)時間関係や仮定条件などを表す。しかし、客観的な視点に立つならば、シヤム猫は、ナカタさんが振り向くか振り向かないかにかかわらず、ナカタさんが振り向く前からナカタさんの方を見ていたと言えないだろうか。

もう少し簡単な例で考えてみよう。「動物園に行けばパンダがいる」という表現は日本語としてごく自然である。しかし、考えてみると、動物園に行こうが行くまいが、動物園にパンダはいるわけである。つまり、日本語で表現されているのは、客観的な時間関係や仮定条件ではない。そうではなくて、話し手の主観的な「見え」の変化が時間軸に沿った形で描写されているわけである。聞き手は、その「見え」を体験して発話を理解する。そのように考えてくると、(7b)のドイツ語訳で「sah er」(彼は見た)が補われているのは、「主客対立」的な事態把握の枠組みでは、むしろ理に適ったことであると言える。別の例でも確認しておこう。

- (8) a. 「問題はハイヒールだったが」事務所に行けばジョギング・シューズ「…」が置いてあると彼女は言った。(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)
- b. [...] sie meinte aber, daß im Büro Joggingsschuhe [...] stünden. <事務所にジョギング・シューズが置いてある>と彼女は言った (A. Ortmanns/J. Stalph 訳)

俯瞰して見るならば、事務所に行こうが行くまいが、ジョギング・シューズは事務所に置いてあるわけである。ドイツ語訳では、日本語の「…」に行けば…が置いてある」という複合文が、「…」が置いてある」と単一文で「バラフレーズ」されている。念のため補足して



おくと、この場合ドイツ語で逐語的な訳が不可能だというわけではない (Wenn wir zum Büro gehen, stehen da Joggingsschuhe (我々が事務所へ行けば、そこにジョギング・シューズがある))。「自然さ」のレベルの問題である。

(2)までの議論をまとめておこう。認知主体が事態に入り込んだ「主客合一」的なスタンスに立てば、目の前の個々の過程は、「分析されるのではなく、ただ知覚され、確認されるだけ<sup>(14)</sup>」ということなる。一方、事態から相対的に遠い視座を取る「主客対立」的なスタンスに立てば、一連の過程は俯瞰的に分析され、総括されることになる。認知言語学では、事態の連続性を知覚する心的操作のことを「メンタル・スキヤニング」(mental scanning)と呼ぶが<sup>(15)</sup>、(8a)では「順次的」(sequential)な認知処理が、(8b)では「総括的」(summary)な認知処理が行われていると言える。また、視点の取り方について、「近接的視点」(close-up perspective point)と「長距離的視点」(long-range perspective point)という区分がなされることがある<sup>(16)</sup>。前者は局所的な視野となるため、動的な事態の捉え方と結びつきやすいのに対し、後者は広域的な視野となるため、恒常的で静的な事態の捉え方と結びつきやすい。以上を踏まえると、(8a)と(8b)に見られるような事態把握の違いを、「順次的・体験的」対「俯瞰的・総括的」という図式でまとめることが可能であろう。この違いが、結果的に複合文か単一文かという選択として現れているわけである (なお、第3節で見た(2)もこの観点で説明することが可能である)。

最後に、やはり誤解のないよう補足しておく、「順次的・体験的」対「俯瞰的・総括的」という対立もまた、程度、傾向の問題である。ドイツ語でも、「順次的・体験的」な把握がなされる場合は当然存在する。

- (9) a. Wir führen durch Weinberge [...], manchmal gab's einen Steinbruch [...]. (ほくたちはブドウ畑を抜けて走った。ときどき採石場があった) (B. Schlink, *Der Vorleser* (朗読者))
- b. ほくたちはブドウが栽培された山あいの道を「[...]」走っていた。「[...]」ときどき採石場があり「[...]」(松永美穂訳)

イタリック部分では、車に乗って移動している主人公の「見え」が「順次的・体験的」に描かれている。「採石場」が文字通りときどき存在している——つまり時間帯によって出現したり、消失したりする——と言っているわけではない。日本語訳は「逐語訳」となっている。

## 7 事態把握と翻訳 (2) —— 自己と他者

話し手(語り手)のスタンスに対して、聞き手(読み手)が選択するスタンスも重要な問題である。話し手が「主客合一」のスタンスを取る場合は、聞き手の方でも話し手のスタンスに歩み寄る必要がある。そうすると、聞き手も「主客合一」のスタンスに立つため、結果、話し手、聞き手、事態の三者が未分化な状態となる。先の(7a)のように、もともと話し手が他者に対し自己投入して事態を把握していた場合には、さらに聞き手の視点も加わり、幾重にも視点が重なり合う状況となる。本章の冒頭で考察の対象を言語内のことに限ると断ったが、この議論をさらに進めていくと、言語と文化の線引きは必ずしも明瞭でなくなる。視点

を重ねるといふこと——つまり、同じ型を取るといふこと——は、自己の領域を他者の領域に拡張することでもあり（他者の自己化と言ってもよいかも知れない）、これは「共感」や「甘え」、さらに「内」と「外」などの問題にもつながっていくであろう。

言語内の話にとどまると、これまでの議論は、時制や話法の話とも関連してくる。例えば、日本語の物語テキストでは、過去形のテキストの中に非過去形（現在形）が頻出することが以前から指摘されているが（ロバ、これも事態把握の問題と関連つけて論じることが可能である。また、日本語のコミュニケーションは「モノローグ（独話）」的であると指摘されることがある（18）。これも話し手と聞き手が同じ型を取るといふ特徴（話し手と聞き手の「同型性」）に還元できるものであろう。次は絵本からの例である。

- (10) a. あれ!? ゆきがふつてないよ! / 「ママ、ママ、そとにいっていいでしょ。ゆきやんでるよ。」（酒井駒子「ゆきがやんだら」）

b. »Guck mal! Es hat aufgehört!« / »Mama, Mama, jetzt darf ich doch raus?«（「ねえ見てーやんだよー」 / 「ママ、ママ、もうそとに行ってもいいよね。」）（U. Gräfe 訳）

最初の傍線部分は、独り言だろうか、それとも母親への語りかけだろうか。おそらく心の中で思ったことがふと口をついて出てきたのであろうが、全くの独り言だとは言えないところもある。それに対してドイツ語訳では、はつきりと引用符に入れられ、「Guck mal」(見てー)と母親への呼びかけになっている。話し手が「主客対立」的なスタンスを取る傾向が顕著な言語では、話し手も聞き手も、言語化される事態に対して距離を置いて対峙する。その結果、話し手と聞き手が向かい合う形での「ダイアログ（対話）」が生じることになる。

参考までに、ドイツ語の独り言では、自分自身に対し二人称 *du*（君）で呼びかけることも相対的に多い（こちらは自己の他者化（19）と言えるだろう）。次は独り言の例である。

- (11) a. »Mir scheint, du faselst und bist nicht ganz klar im Kopf [...]«（「俺には、お前はばかになって言ってるよ、頭がどうかしているように思える」）（Th. Mann, *Der Zauberberg*（魔の山））

b. 「うわ言をいったりして、頭がはつきりしていないような気がする [...]」（高橋義孝 訳）

ドイツ語の原文では、独り言の中に一人称代名詞 *mir*（俺には）と二人称代名詞 *du*（お前は）が同時に出てきている。日本語訳ではその点はいまいであるが、少なくとも原文のような明確な対立（話し手と聞き手の「相補性」）は感じ取れない。この関連で言うと、ドイツ語の再帰代名詞の使用も特徴的である。例えば、*sich waschen*（自分を洗う）、*sich rasieren*（自分を剃る）、*sich kämmen*（自分を梳かす）では、いずれも *sich*（自分）が出てくる。一方、これに対応する日本語は「体を洗う」「ひげを剃る」「髪を梳かす」で、特に「自分」が意識されることはないように思われる（第3節の(1)もこの観点で論じることができただろう）。

## 8 おわりに——再び翻訳方法の多様性

もう一度絵本の例を見てみよう（次の(12)は(3)の再掲）。

- (12) a. *Bald wurden die Schatten länger als sie selbst und sie führen nach Hause.* (やがて影が彼ら自身よりも長くなりました。そして彼らは家へ帰りました) (H. Heine, *Freunde* (ともだち))  
 b. いつのまにか かげが ながくなった。3 びきの せたけ よりも ほら こんなに。さあ うちへ かえろう。(池田香代子訳)
- (13) a. ある日のことです。ひさしぶりに まどをあけてみると…… なんていいお天気 でしょう! (湯本香樹実 「くまとやまね」)  
 b. *Eines Tages, nach langer Zeit, öffnete er wieder einmal das Fenster und die Sonne strahlte ...* (ある日、久し振りに、くまは再び窓を開けてみました。すると太陽が輝いていました) (U. Grafé 訳)

日本語のテキストは読み手を巻き込んだ臨場的な語りになっているのが特徴的である(とりわけ傍線部)。(12b)で言えば、「いつのまにか」という主観的な表現を用いて読み手を物語の中に引き込み、「ほら」「さあ」と呼びかけて読み手と視線を合わせていく(ついながらも「ほら、こんなに」部分は第2節の⑧「加筆」と見なすことができる)。そして最後は、「うちへかえろう」と読み手を完全に巻き込んだ形で語りかける。もはや過去時制で語られる世界ではない。語り手・読み手(主体)と物語の世界(客体)の境界があいまいになり、語り手も読み手も物語世界に臨場することになる。それに対しドイツ語では、物語の世界はあくまで物語の世界として、距離を置いて読み手の前に提示されている。これまでの議論を踏まえると、それぞれの訳は、各言語における基本的な事態把握のタイプを踏まえていることが確認できるわけである。

本章では俳句の例も取り上げたが、常に自己投入的な読みが期待される俳句の翻訳では、極めて困難な状況が生じることが容易に想像される。最後にいくつか見ておきたい。

- (14) a. 一家に遊女もねたり萩と月(芭蕉)  
 b. *Wir schiefen alle untern gleichen Dach: / Dimen und Ginsterblüten, / der Mond und ich.* (我々はみんな同じ屋根の下で眠った／遊女とエニシダの花／月と私) (D. Krusche 訳)

「萩」の訳出については(ここでは考えないことにしよう(レアリアの問題である。第2節の⑥「適応」も参照)。(14)で着目すべきは、*wir* (私たち)や *ich* (私)という一人称代名詞が補われていることである。「遊女」と「萩」、「芭蕉(私)」と「月」という対比を示す狙いもあったと思われるが、平均的な日本語母語話者にとって、詠み手である芭蕉自身が「一家」に寝ていることは自明のことであって、わざわざそれを言語化するのはいかえって野暮であるとさえ感じられよう。臨場的なスタンスが一般的でないというドイツ語の制約から来る「パラフレーズ」であると考えられる。

一方で、ドイツ語においても臨場性を出す、つまり「主客合一」のスタンスに引きつける工夫はないだろうか。おそらくその一つが直示表現の使用である。俳句のドイツ語訳(あるいは英語訳)を見ていると、「この」や「この」などの直示表現が度々補われていることに気づく。しかしながら、最大限に「主客合一」的な事態把握がなされる場合は、これらの表現さえ使われない点に気をつけておいてよいだろう(なお、次の例でも「蟬」や「菊」の

訳出に関してはレアリアの問題である)。

- (15) a. 閑さや岩にしみ入蟬の声 (芭蕉)  
b. Oh, diese Stille: / Selbst durch die Felsen dringt doch / Des Heimchens Zirpen. (おお、この静けさ／岩にさえしみ入る／イエロオロギの声) (J. Ulenbrook 訳)  
(16) a. 白菊の目にたてゝ見る塵もなし (芭蕉)  
b. Die weiße Aster, / Die dort vor Augen steht, / Zeigt nicht ein Staubchen. (白いアスター／その目の前に立っている／塵一つ見せない) (J. Ulenbrook 訳)

以上、一見原文からかけ離れているように見える翻訳の例をいろいろと見てきた。本章で扱った「パラフレーズ」の事例に関して言えば、いずれも各言語の基本的な事態把握を踏まえた訳になっていることが確認できたと思う。とりわけ読み手の理解という観点に立った場合、それらは必ずしも「正確性」を逸脱しているとは言えない。「逐語訳」によって誤解を生じる可能性がある場合はなおさらである。翻訳においては、「言語的な特徴を考慮した上での正確性」が状況に応じて求められると考えるならば、本章で扱った事例はいずれも正当な翻訳、場合によっては巧みとも言える翻訳であったと言えるだろう。当然の結論かも知れないが、これをもって本章の結びとしたい。

注

- (1) 鳥飼玖美子編著『よくわかる翻訳通訳学』(ミネルヴァ書房、二〇一三年)、四八―四九頁。  
(2) 水野真木子「各種通訳倫理規定の内容と基本理念」(『通訳研究』五号、二〇〇五年)、一六七頁。  
(3) 藤濤文子『翻訳行為と異文化間コミュニケーション』(松籟社、二〇〇七年)、第七章。  
(4) 藤濤文子、前掲書、一七頁。  
(5) Sebastian Löbner, Wovon wir reden, wenn wir von Gefühlen reden (in Akio Ogawa, ed., *Wie gleich ist, was man vergleicht?*, Tübingen, 2016), p. 170.  
(6) 藤濤文子、前掲書、一四一頁。  
(7) 藤濤文子「日独語翻訳にみる異文化間コミュニケーション行為」(神戸大学『ドイツ文学論集』三四号、二〇〇五年)、二六頁。  
(8) Ronald W. Langacker, *Cognitive Grammar*, Oxford, 2008.  
(9) 例えば、大藪正彦「ドイツ語の事態把握をめぐって」(中村芳久教授退職記念論文集刊行会編『ことばのパス・ペクティブ』開拓社、二〇一八年)。  
(10) Arnold Heinrich Müller, *Geheimnisse der Filmgestaltung*, 2. Aufl., Berlin, 2010, p. 102.  
(11) Dietrich Krusche, *Haiku*, München, 1994, p. 117.  
(12) とりわけ、Yoshiniko Ikegami, 'Subjective Construal' and 'Objective Construal' (*Journal of Cognitive Linguistics* 1, 2015) を参照。  
(13) Masahiko Ozono, *Subjektive und objektive Auffassung (Neue Beiträge zur Germanistik 7 (1), 2008)*.

- (14) Peter Hartmann, *Einige Grundzüge des japanischen Sprachbaues*, Heidelberg, 1952, p. 31.
- (15) Ronald W. Langacker, *ibid.*
- (16) Leonard Talmy, The Relation of Grammar to Cognition (in Brygida Rudzuka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*, Amsterdam, 1988).
- (17) 例えば、池上嘉彦「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」(日本記号学会編『語り——文化のナラトロジー』東海大学出版会、一九八六年)。
- (18) 例えば、池上嘉彦『日本語論』への招待』(講談社、二〇〇〇年)。
- (19) John Haiman, Grammatical Signs of the Divided Self (in Werner Abraham et al., eds., *Discourse, Grammar and Typology*, Amsterdam, 1995).